塩谷遺跡発掘調査報告書

1981年３月

島根県広瀬町教育委員会

塩谷遺跡発掘調査報告書

1981年３月

島根県広瀬町教育委員会

はじめに

広瀬町大字富田とその周辺地域には、戦国大名尼子氏の居城富田城跡を中心に、侍屋敷跡と考えられる塩谷、新宮谷、さらに町屋跡とされる富田川河床遺跡が存在し、これらの異なる性格をもつ遺跡群の発掘調査は、全国的に注目を集めております。

なかでも富田城跡は、昭和9年に国指定史跡となり、昭和50年から山中御殿の石垣修理を中心とする環境整備を実施し、往時の姿が復原しつつあります。一方、富田川河床遺跡は、昭和49年からの発掘調査が継続されており、路・建物跡等が検出されるなど、町並の実態が徐々に明らかになっております。しかし、侍屋敷跡と考えられている塩谷、新宮谷については、部分的発掘調査が実施されているにすぎず、不明な点を多く残しておりました。

近年、広瀬町内で進行中の農業構造改善事業によって、塩谷、新宮谷両地区の遺跡の実態を早急につかむ必要が生じたため、広瀬町教育委員会では、広瀬町内遺跡群総合整備計画策定事業を実施中の島根県教育委員会と協議し、昭和55年度の国庫補助事業として塩谷地区の発掘調査を行ったものであります。詳細は以下に示す通りで十分ではありませんが、富田の歴史をひもとく一素材となりうるものと考えており、広くご活用いただけましたら幸いであります。

最後に、調査実施にあたりご指導いただきました島根県教育委員会並びに終始調査に協力下さった地元をはじめ関係各位に対して衷心より厚くお礼申しあげる次第であります。

昭和56年3月

広瀬町教育委員会

教育長　小藤武雄

例　　言

1. 本書は、広瀬町教育委員会が昭和55年度の国庫および県費補助事業として実施した能義郡広瀬町大字富田所在の塩谷遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、昭和55年5月27日から昭和55年11月12日の間で行った。
3. 調査体制は以下のとおりである。

調査指導　島根県教育委員会
調査員　石井　悠　（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）
松尾慶三　（広瀬町教育委員会嘱託）
事務局　釈臣正見　（広瀬町教育委員会社会教育課長）
太田善明　（　〃　社会教育主事）
小池芳枝　（　〃　主事）

4. 調査にあたっては、地元各位の協力があり、村尾秀信・西尾克己（島根県教育委員会文化課主事）、藤原久良（広瀬町文化財専門委員）、内田雅己・実重史郎（富田城関連遺跡郡調査整備委員会）の諸氏に助力を賜った。
5. 本書の編集および執筆は、石井、西尾、内田の3名が協議して行った。また、陶磁器の分類については島根県立博物館学芸員の村上勇氏に依頼した。なお、作製にあたっては、島根大学学生の伊田喜浩・伊藤克己の両氏に協力を得た。

目　　次

はじめに
Ⅰ. 調査に至る経過 …… 1
Ⅱ. 遺跡の位置と歴史的環境 …… 3
Ⅲ. 調査の概要 …… 9
1. 調査の方法
2. 検出遺構
3. 出土遺物
Ⅳ. 結　び …… 21

Ⅰ　調査に至る経過

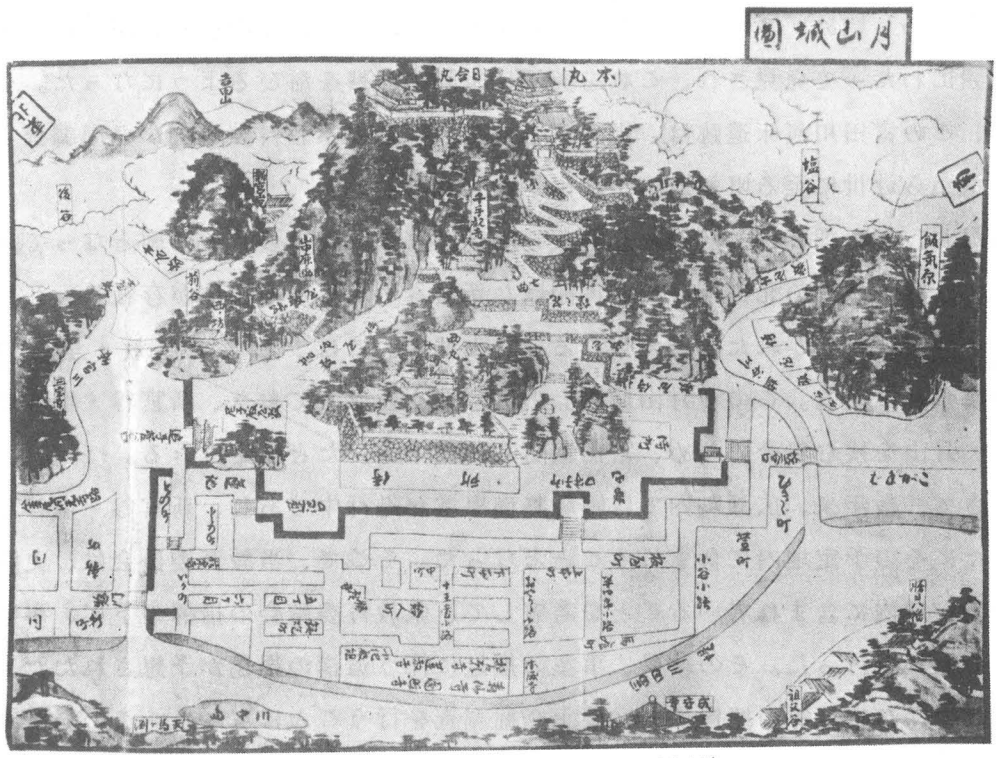
島根県能義郡広瀬町大字富田（とだ）とその周辺地域は、尼子、毛利、堀尾氏の城下町として繁栄したことで著名である。史跡富田城跡の周囲には、武家屋敷・町屋等が配され、かなり賑っていたと思われる。寛文７（1667）年の記録によれば、その前年、当地を襲った大雨は、大洪水を引き起こし、富田川（現在の飯梨（いいなし）川）の流れを変えたため、富田城北西に広がっていた城下町は、水下に没したものと考えられる。ところが、昭和30年代になると、川底の浸食と共に城下町は再びその姿を現わし始め、さらに昭和48年の異常干ばつ時には、建物跡や石組井戸跡が広範囲にわたって発見され、これを契機に世間の注目を浴びるようになった。その後、この富田川河床遺跡は、当教育委員会及び島根県教育委員会が発掘調査し、中世から近世に至る町並遺構が検出されつつある。

なお、この調査は、河川改修事業の関係で将来も続けられる計画となっている。また、富田城跡の北側及び南側に開けた新宮谷・塩谷（しおたに）にも遺跡が存在し、江戸時代中期以降に描かれたと考えられる「月山城図」には、新宮党屋敷・里御殿・侍屋敷がみえる。この「月山城図」の真ぴょう性はさておき、新宮谷・塩谷地区は、月山を挟む谷合のため、富田城防御の要であったと推定できる。

さて、数年来、広瀬町内では圃場整備事業が進行中であり、新宮谷・塩谷も、新たにその予定地内に含まれることとなった。そこで、当教育委員会は、史跡が両予定地内に含まれていることを考慮して、県教育委員会の指導の下に、事業者との協議を行った。その結果、事業の推進に伴う遺構の損傷が予想されたため、遺跡の保存状況等を把握する必要上発掘調査を行うことになった。この発掘調査は、昭和55年度国庫補助事業として、国及び県からの補助を得て、当教育委員会が行ったものである。

当初、この調査の計画は、新宮谷・塩谷の両地区で実施される予定であった。しかし、圃場整備事業計画にあわせて塩谷地区から調査を始めたものの、予想外の日数を要したこと、また、年度途中から、塩谷川荒廃砂防事業（河川のつけ換え）に伴う調査が始ったことにより、新宮谷地区の調査は、昭和56年度以降に見送ることとなった。

圃場整備事業は、同地区でほぼ時を同じくして、県教育委員会が行った富田城関連遺跡群調査の結果とあわせて検討することになった。その結果、史跡内は現状保存を基本とし、部分的に盛土工法を取り入れる方針で、昭和55年９月26日付けをもって、現状変更の許可通知を受けている。また、史跡外については、遺構の検出された部分を中心に、盛土工法を取り入れて、遺構を保存することになっ



「月山城図」（『雲陽軍実記』添付）

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

塩谷遺跡は、島根県能義郡広瀬町大字富田に所在する。この谷は、飯梨川の河口から上流へ約10㎞、周囲は急に山がちとなり、その中を縫うように飯梨川の支流が、幾つもの細長い谷を形成している。塩谷は、月山南麓に位置する幅約100ｍ・長さ２㎞ほどの小さな谷である。

現在は、主に水田・畑地として利用されているが、江戸時代に描かれた「月山城図」や文献から推測すると、戦国時代には富田城下の集落の一画を占めており、家臣団等の屋敷があったようである。それに関連した地名・字名はそれほど多く残っていないが、城郭構造からみると谷の入口付近には、富田城山中御殿平への登り口、中央部には、富田城本丸跡への登り口がそれぞれあり、この谷が富田城を防御する上で重要な位置を占めているのがわかる。また、西登り口のほぼ中央には、明星寺跡とされる居館的性格の強い二段状の小高い平坦地があって、本丸への登り口付近には、中世末期から近世初頭頃の宝篋印塔（伝尼子晴久墓）が見られる。

飯梨川下流に広がる安来平野は、古代遺跡の集中地区として著名であるが、富田城周辺地域ではあまり古代遺跡の存在は知られていない。今後、精密な分布調査を要する地帯である。

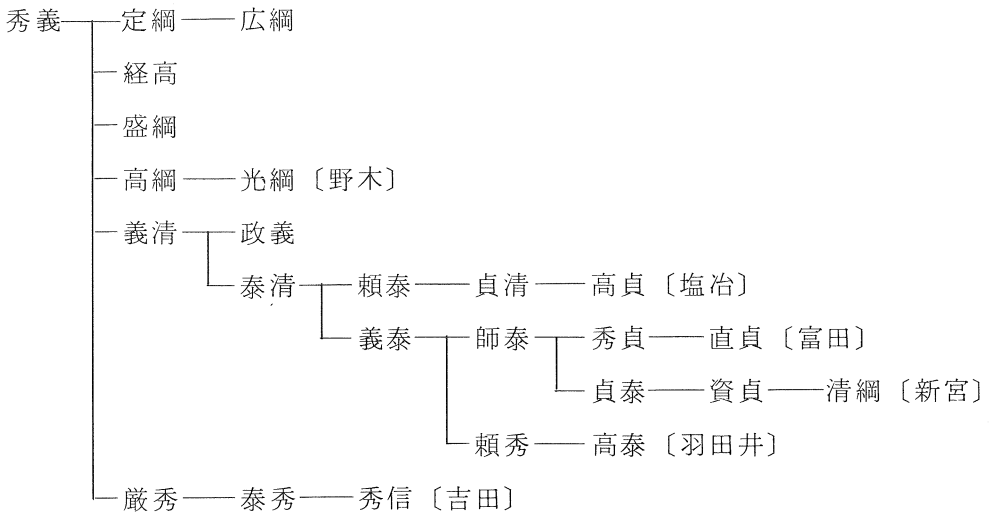
（古代）

８世紀に作成された『出雲国風土記』によると、現在の広瀬町の大半は、かっての意宇郡（おう）飯梨郷（いいなし）にあたる。郷庁は現在の福頼（ふくより）（広瀬の中心より南へ約２㎞）のあたりとされるが、詳細については不明である。10世紀の史料である『和名類聚抄』では意宇郡が意宇郡と能義郡の２つに別れ、飯梨郷が口縫郷となっていた。

（富田庄の成立）

律令体制の崩壊に伴い、平安時代末期に「富田庄」は成立し、1160（永暦元）年９月の藤原邦綱書状（『兵範記』紙背文書）に「出雲国富田御庄申注文弐通」とあるのが史料上の初見である。本書状は、その内容・伝存状況から察するに、邦綱が摂関家の家司（執事）として出したものであり、当時富田庄が全国に広がる摂関家領の１荘園であったと考えられる。恐らく、11世紀の後半から12世紀の初

出雲佐々木氏略図〔続群書類従所収　佐々木系図による〕



頭までの間に、荘園の立券荘号と摂関家への寄進がなされたものと推定される。

（富田氏の支配）

鎌倉幕府の成立に伴い、全国各地に守護・地頭が設置された。富田庄最初の地頭職は、1271（文永８）年に作成された「杵築大社（出雲大社）三月会頭役結番帳」（千家文書）によると、信濃前司すなわち出雲国守護佐々木泰清であり、当時、富田庄が神門郡の塩冶郷（守護所）等と共に守護領の一つであったことが知れる。しかし、この様な体制は承久の乱（1221年）以後のことと推定されるため、それ以前、富田庄に地頭が補任されていたかどうかは不明である。

泰清の後、出雲国守護職は実子頼泰に譲られるが、その所領分は泰清の庶子に割譲され、ここ富田庄については義泰が譲り受け、姓も富田と称し、これ以後富田庄は富田氏の支配するところとなる。さらには、義泰も富田庄をその庶子に割譲したことにより、広瀬・羽田井・山佐等の諸氏が分出するに至った。その中には、現在の富田城跡の北に位置する新宮谷地域を領した新宮氏と称する一族もいた。

1333（元弘４）年の鎌倉幕府滅亡に端を発した全国的な南北朝の動乱が約60年間も続く。この南北朝時代に、富田庄の領主富田秀貞は、出雲国守護職と塩冶郷を譲り受けた頼泰の孫塩冶高貞と同様に、北朝（幕府）方として活動しており、

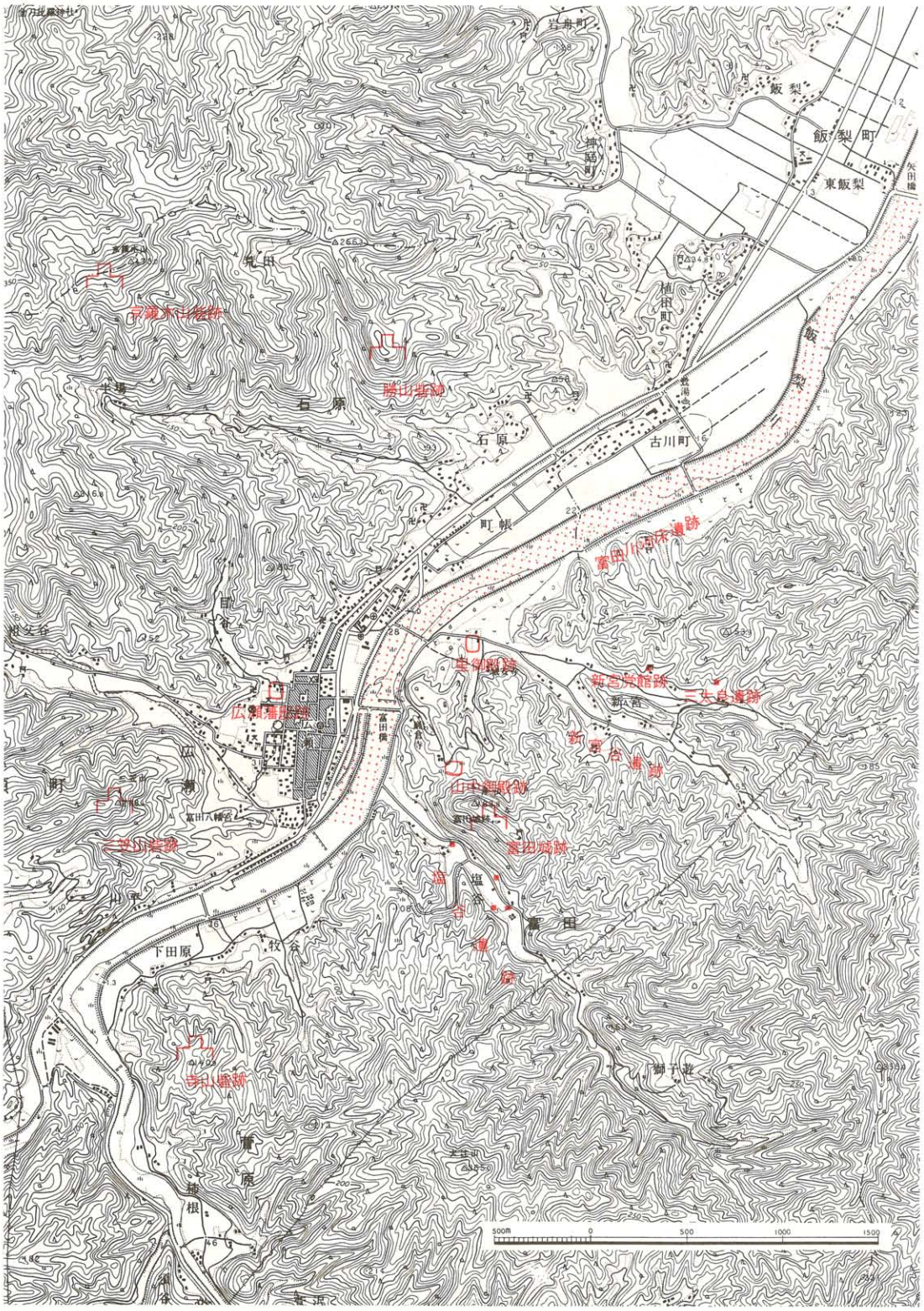


図１．塩谷遺跡と周辺部の主要遺跡

その名は『太平記』にもみられる。さらに、康永～貞和年間（1340年代)には、美作国守護職も得ており、1341(暦応４）年に、塩冶高貞が討伐された後も、幕府の有力御家人として活動を続けていた。

1354（文和３）年、幕府は出雲国守護佐々木高氏（京極道誉）に、富田庄をはじめとする富田秀貞の旧領を与えた。それは、秀貞が観応年間(1350 ～ 53年)に南朝方へと転じて、京極氏を中心とする出雲国内の北朝勢力と対立するようになり、美作国守護職他その所領を没収されたためである。ここに富田庄は再び守護領になったが、南朝方より富田氏に本領安堵され、伯耆国守護山名氏による出雲国への介入もあって、京極氏が富田庄を掌握するに至るのは、明徳の乱（1391年）以後のことである。

（京極氏～堀尾氏の支配）

明徳の乱により山名氏の勢力は弱体化し、京極氏の出雲国支配が確立するわけだが、乱が起った当時、山名氏の代官として「富田城」にいたのは塩冶氏であった。富田氏は康安年間（1361 ～62年）に、秀貞の子直貞の活動が『太平記』に記載されているのを最後に、史料から姿を消してしまったのではあるが、この時期すでに、出雲国守護所が塩冶から富田に移っていたことがわかっている。当時の交通は、その中心が山陰道ルートから日本海水運と中国山地越ルートへと移り、さらに、塩冶高貞討伐後の出雲国守護職をめぐって、山名・京極の両氏が対立した事柄もあい重なって、必然的に出雲の東玄関ともいうべき富田の重要性が大きく上昇したとも推定できる。

明徳の乱後、出雲国守護になったのは京極高詮であるが、彼は幕府の要職にあって在京する機会が多かったため、国の支配は代官に委ねられていた。

尼子氏は、京極氏の庶子家に属し、近江国犬上郡甲良庄尼子郷を所領とした一族で、京極高詮の弟高久を祖とし、その長子詮久が本領を受け、弟持久が惣領であり出雲国守護職である京極高詮の代官として出雲国へ下向した。代官尼子氏の動きが活発化するのは、応仁年間の清定からであるが、その子経久の時代になると京極氏から独立、その後戦国大名へと成長し、16世紀初頭には中国地方にその覇をとなえるに至った。しかし、その勢力拡大は、度重なる軍事行動によるものであったがために、充分な支配体制を築くことはできなかった。さらには、富田

の地が出雲国内においてあまりに東に偏していたため、本拠地出雲国の国人・領主等を完全に掌握できなかった上、大内氏との抗争で疲弊し、ついに1566(永禄9)年、毛利氏の前に屈したのである。

毛利氏の支配は豊臣政権との講和により、一時安定したかに見えたが、関ケ原の戦(1600年)の敗北によって防長二ケ国以外の所領を没収され、毛利氏による35年間におよぶ出雲国支配もその幕を閉じた。

毛利氏にとって替った堀尾氏は、領国経営上の見地から、1611(慶長16)年に城を当地より松江に移し、南北朝期より約250年続いた政治的中枢としての立場に終りを告げた。

一方、城下町の機能がなくなった富田の町並は、半世紀を経た1666(寛文6)年の洪水で飯梨川の河床下に埋没し、同年成立した広瀬藩は町を旧城下町の対岸にあたる、広瀬に移したのである。

表 1.　富田庄の関係年表

西　暦（年号）	富　田　庄　の　動　向	中 央 の 事 項
1160（永暦元）	「富田庄」の名が初めてみえる〔『兵範記』紙背〕	
1185（文治元）		平氏滅亡、鎌倉幕府成立
1221（承久３）	佐々木義清、出雲・隠岐国守護となる	承久の乱
1271（文永８）	富田庄地頭として出雲国守護佐々木泰清がみえる〔千家文書〕	
1333（元弘３）		鎌倉幕府滅亡
1336（建武３）	出雲国守護塩冶高貞、日野掃部左衛門入道・富田弥六入道（頼秀力）の両名に杵築大社領を国造に沙汰付けるよう命じる〔北島文書〕	室町幕府成立
1341（暦応４）	塩冶高貞討伐される	
1342（康永元）	造営中の天龍寺に出向いた足利尊氏・直義の供奉人として佐々木美作太夫判官（富田秀貞）、佐渡太夫判官（京極高氏）の名がみえる〔天龍寺造営記録〕	
1343（康永２）	京極高氏、出雲国守護となる〔正閏史料〕	
1344（康永３）	このころ富田秀貞は美作国守護、守護代は一族の高泰（頼秀子）〔『東作誌』〕	
1350（観応元）	「富田関所」の名がみえる〔三刀屋文書〕	観応の擾乱
1351（観応２）	富田秀貞、鰐淵寺南院に阿井郷を寄進	
1354（文和３）	京極高氏、富田庄（富田秀貞跡）を獲得〔佐々木文書〕	
1379（康暦元）	出雲国守護が京極氏から山名氏へ交替	康暦の政変
1380（康暦２）	富田庄で合戦があり、岩倉寺焼失〔岩倉寺文書〕	
1391（明徳２）		明徳の乱
1392（明徳３）	出雲国守護が再び京極氏へ移る	南北朝統一
1467（応仁元）		応仁の乱始まる
1468（応仁２）	出雲国守護代尼子清貞、国内の山名（西軍）与党と戦う〔佐々木文書〕	
1486（文明18）	尼子経久、出雲国守護代塩冶掃部介を討つ	
1554（天文23）	尼子晴久、新宮党を滅ぼす	
1566（永禄９）	尼子氏滅亡。出雲国は毛利の支配下となる	
1573（元亀４）		室町幕府滅亡
1591（天正19）	吉川広家、出雲三郡、伯耆三郡を領し富田城に入る	
1600（慶長５）	堀尾氏が出雲国に入部	関ケ原の戦
1611（慶長16）	松江移城	
1666（寛文６）	富田川の洪水により町並が埋まる 広瀬藩の成立	

Ⅲ 調 査 の 概 要

1. 調査の方法

塩谷遺跡の遺構残存状況及び範囲確認を調査の主眼としたため、谷全体に一辺１０mの方眼を組み、２１カ所（水田１３枚分）で一辺４mの調査坑を穿ち、発掘調査を行った。方眼の基準は富田川河床遺跡その他の調査にあわせるため、N２７° ２８′ １０″ Eに主軸をとった。主軸は西から東に「あ・い・う・……」と呼び、主軸に直交する基準線は北から南に「０００・００１・００２・……」と呼んだ。この両基準線の交点は「あ００１・い００２・……」とし、各方眼の呼称は西北隅の呼称をそのまま利用した。

調査区の設定は、地形からみて遺構の存在する可能性の高い地点を主として行ったが、「は１７２」「ひ１７２」・「ひ１５３」「ふ１５３」・「と１２６」「な１２６」（以下記述の便宜上「はひＧ」・「ひふＧ」・「となＧ」と呼ぶ）の３地区で遺構が存在することが判明したため、「はひＧ」・「ひふＧ」について若干の拡張を行った。「はひＧ」の北側を流れる塩谷川（砂防河川）を圃場整備事業にあわせて、「はひＧ」の南側につけかえる計画があったため、町の単独事業として、河川つけかえ予定地内の発掘調査を富田城関連遺跡群調査整備委員会（当教育委員会が事務局）が行ったことは、先にふれたとおりである。

2. 検 出 遺 構

「はひＧ」地区

この調査区は、塩谷の入口から奥へ約１km入った地点にあり、現在、「元梅木荒神南道下夕」・「道下夕」という字名が残っている。月山頂上（史跡富田城跡の主郭が存在）に至る谷あいの道筋（字名「釜ケ谷口」）に面しており、背後には丘陵がせまっている。表土下４０～５０cmで遺構は検出できたが、全体に、あまり保存状態はよくなく、河原石が散乱していた。これは、塩谷川の氾濫によるものと考えられる。検出された遺構は、長さ3.６mの石列及び集石遺構だけで、かろうじて残ったものである。出土遺物についても、陶磁器の小破片が検出された程度である。（図３）

図2　遺構検出地点位置図

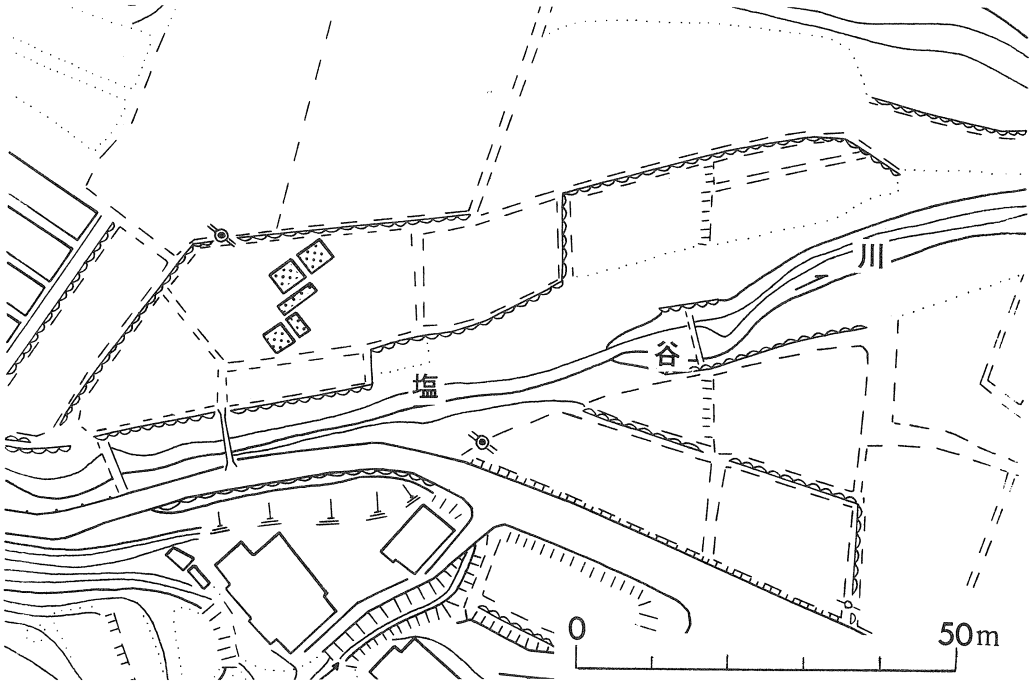


図３「はひG」地区位置図

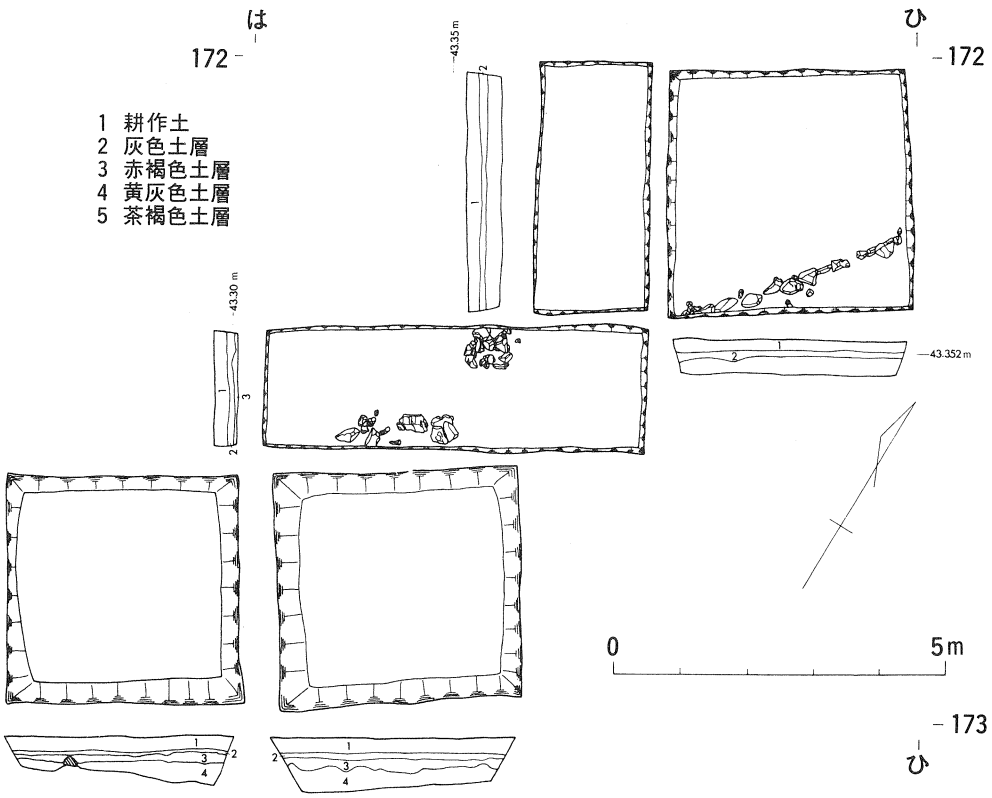


図４「はひG」地区遺構実測図

「ひふG」地区

この調査区は、「はひG」より約１８０m北の地点にあり、塩谷川東岸の小段丘上に位置し、町道に沿って調査溝を設定した。この地点は、現在、「吉右エ門下夕」という字名が残っている。町道をはさんで月山城側は、史跡富田城跡の指定地内に属する。表土下３０～４０cmで、幅約4.5m、深さ約１m、長さ３３mの溝状遺構を検出した。遺構西壁はやや外傾する石垣で、大半は人頭大の河原石を野面積みにしている。遺構東壁は、なだらかな素掘りの斜面となっている。溝内部は、東壁から斜面に沿って、６層の土が入っており、溝の上面は、ほぼ水平に３層の土層が確認された。ただし、２層目までは耕作土である。溝内部から土師質土器・天目・瀬戸焼等の破片が、又、第２・３層からは、唐津焼・伊万里焼の破片と共に寛永通宝・祥符元宝・元豊通宝が出土した。このことから、この溝は江戸時代初期に埋められ、整地されたものと推定できる。石垣より西側は約10mの奥行きがあり、明治時代の切図を見ると、当時はもう少し奥行きがあった様子で、塩谷川の氾濫等により地形が変化したと推測される。今回の調査では、柱穴等を検出するには至らなかったが、何らかの建物が存在していたと考えられる。町道の東側は指定地であり、月山山麓まで約５０mある。その土地を、本年度、県教育委員会が調査したところ、石組状施設、柱穴が検出されている。以上のことから、本調査区との相互関係を検討する必要がある。（図６）

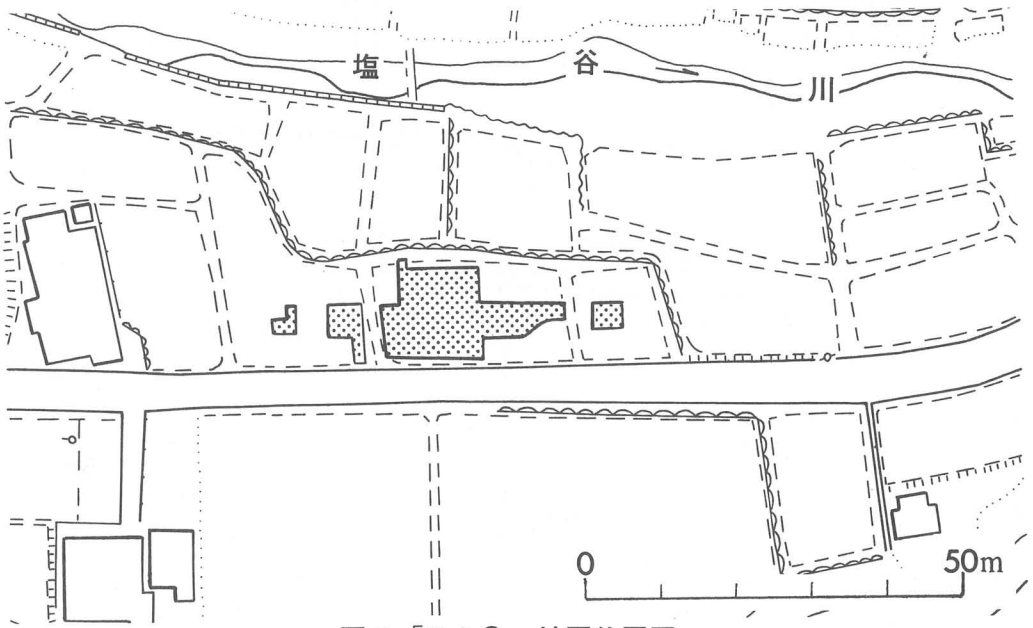


図５「ひふG」地区位置図

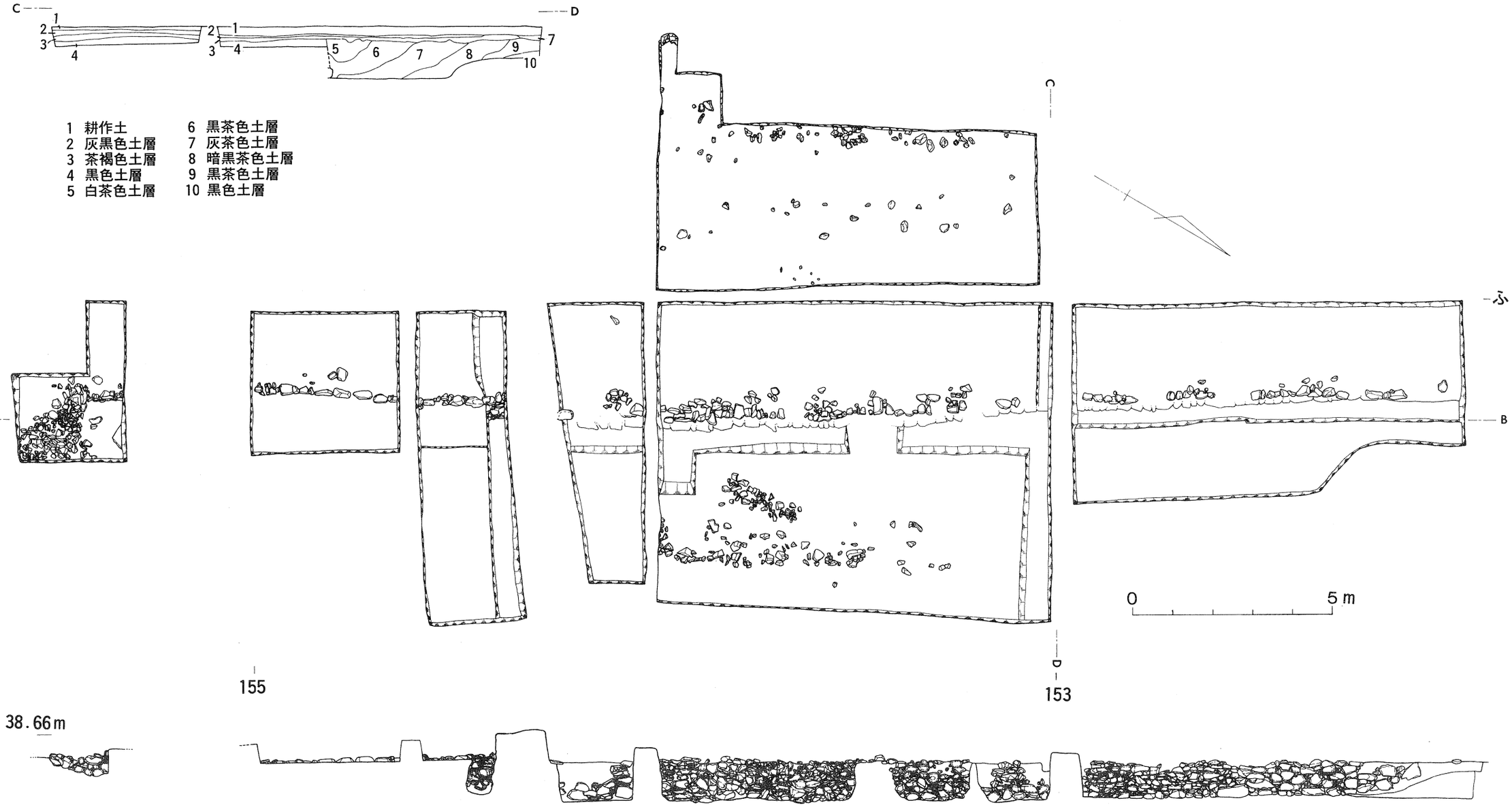


図 6.　「ひふG」地区遺構実測図

「となG」地区

この調査区は、塩谷の入口から奥へ約５００m入った塩谷川西岸にあたり、「ひふG」より約１８０m北の地点にある。現在、「妙心寺谷下モ」という字名が残っており、北東方向に月山城跡、背後には明星寺跡（三方を削りとった方形状の小高い平地）が控え、谷を約３００m下ると、塩谷口と呼ばれる月山城跡への登り口が存在している。この一帯は、地層が安定しており、地表下約６０～７０cmで検出した遺構には、集石遺構２、土壙２がある。調査範囲が狭かったためその性格は不明瞭であるが、集石遺構は、長径１０～３０cmの石が３～４個集積したもので、その間1.8mを測ったが、建物礎石ではないかと考えられる。土壙１は、長径７０cm、短径６０cm、深さ60cmのもので、内部には河原石が入っていた。土壙２については、完掘していないのではあるが、長径１４０cm、短径７０cm、深さ５０cmのもので、内部に挙大の河原石が入っていた。出土遺物は、土壙２から、土師質土器・備前の破片が、また、遺構面とその直上から、青磁・白磁・染付等の中国製陶磁器片をはじめ、瀬戸焼・備前焼・唐津焼・土師質土器片が検出されている。（図８）

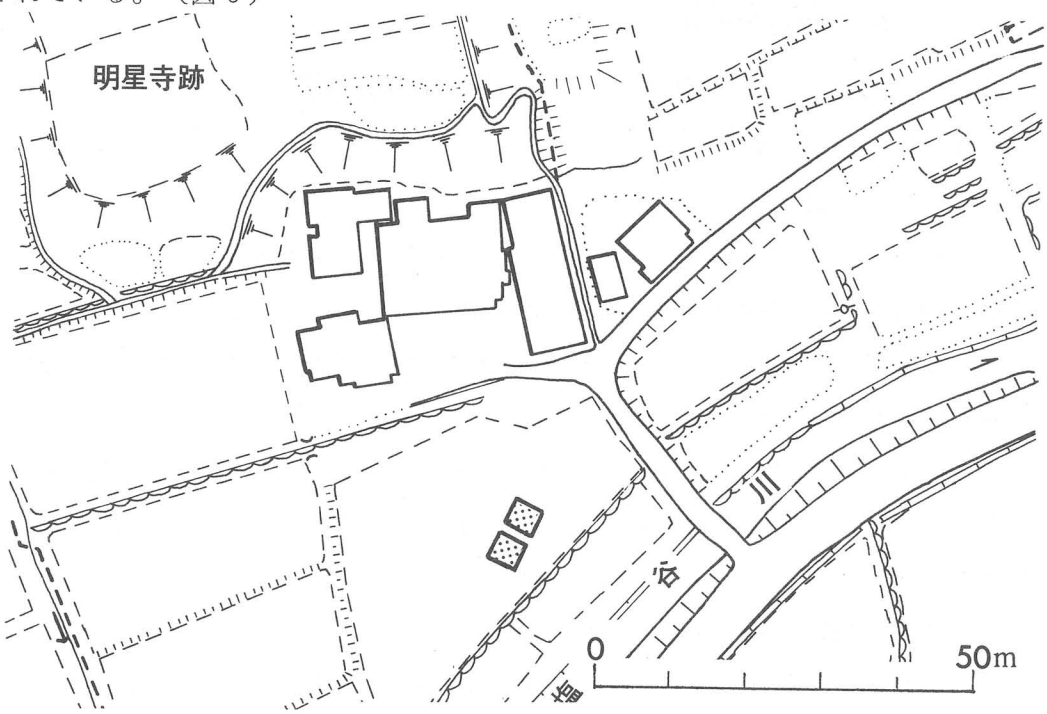


図７「となG」地区位置図

「その他の調査区」

各調査区で、水平に堆積した数層の土層が確認され、出土遺物も認められたが、

遺構を検出することができなかった。また、調査区の随所で、河原石の堆積が認められたが、これは塩谷川の氾濫によるものと考えられる。

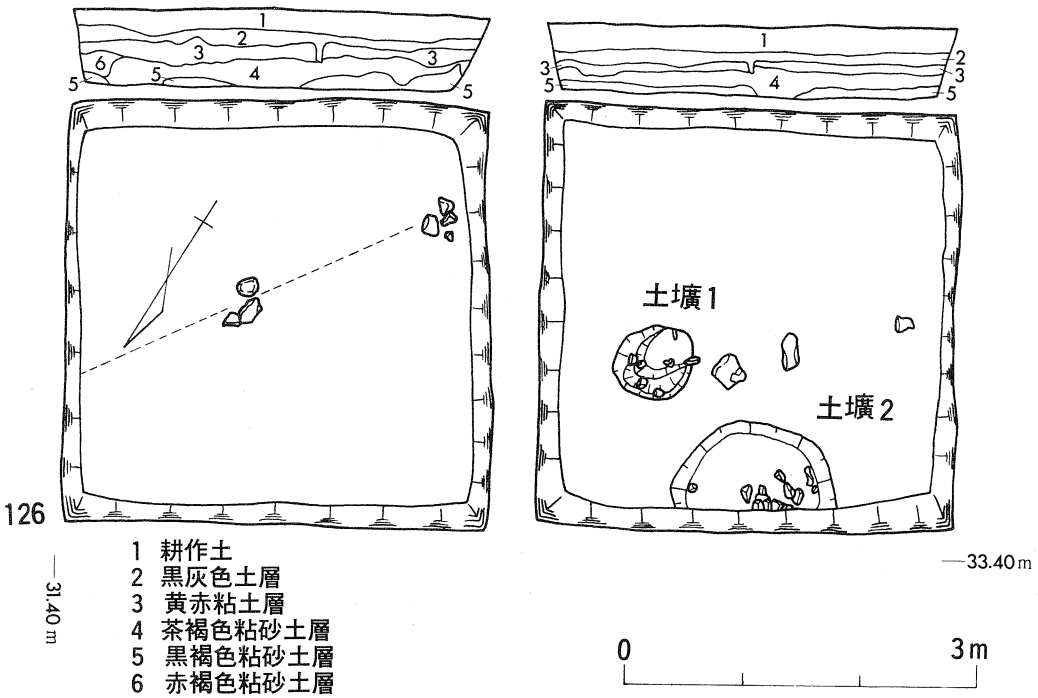


図8「となG」地区遺構実測図

3. 出 土 遺 物

「はひG」地区

この調査の出土品としては、少数の陶磁器破片と土師質土器があり、これらは遺構と同様、川の氾濫のために総て細片となっている。

種別としては、青磁、白磁、染付、美濃焼、伊万里焼およびその他の江戸時代以降のものが出土した。

上層の表土およびその下層には伊万里焼を中心として新しい陶磁器片が多い。また、下層には中国産の陶磁器と美濃焼の破片が認められ、その時期は16世紀前葉から中葉にかけてのものと推定される。

「ひふG」地区

この調査区の遺物としては、古銭9枚と僅かな鉄器および焼物の破片600片が出土している。

古銭は9個発見されている。祥符元宝1枚（宋、初鋳年1008年）と元豊通

宝２枚（宋、初鋳年１０７８年）および元祐通宝１枚（宋、初鋳年１０８６年）は、石垣の西方に設けたグリットの上層部から、また、寛永通宝５枚（日本、初鋳年１６３６年）は石垣西方の上層から出土している。

焼物には、奈良時代前後の須恵器と土師器の破片が２０近く混じっているが、全体からみれば極めて少数で、その多くは戦国時代以降の陶磁器である。表土とその下層からは、白磁、染付も若干出土したが、江戸時代以降の唐津焼や伊万里焼およびその他の日本産陶磁器が大部分を占めている。第３層以下においても伊万里焼など日本産のものもかなり認められるが、全体的には土師質土器が多いのが特徴である。

陶磁器の時期は、中国産の青磁、白磁、染付と日本産の美濃焼・備前焼が占める１６世紀前葉から中葉と、伊万里焼をはじめとする１８世紀以降の２期に分けられる。

「となG」地区

遺物としては、土壙２を中心に陶磁器の破片が６０数片が発見されている。

土壙１からは、青磁の盤１片と径約１㎝の鉄砲玉（鉛玉）２個が出土している。

土壙２には、青磁（碗１片、皿１片、盤１片）、白磁（皿２片）、染付（皿１片）、備前焼（３片）、土師質土器（皿３６片、土釜５片）があり、１６世紀のものである。

その他の部分には、中国産・日本産の陶磁器の破片が、１０数片あり、その多くは、１６世紀に属するものである。また、鉄器片も５片出土しているが、形態は不明である。

その他の地区

遺構が検出されなかった地区においても、少量の遺物が採集されている。

主要なものとしては、ルツボ（ま－１５５－１）や１４世紀代の伝世物と考えられる蓮弁文青磁碗（は－１６２－１）および１６世紀代の染付の皿等が出土している。

表2　塩谷遺跡「ひふG」地区出土遺物数量表

耕作土層
（1.2.）

名称（器種）	破片数
青磁（碗）	
（皿）	
（鉢）	
（盤）	
（香炉）	
（その他）	
計	
白磁（碗）	
（皿）	3
（坏）	3
（その他）	1
計	7
染付（壷）	5
（甕）	3
（鉢）	
（坏）	
（その他）	2
計	10
南蛮系（壷）	
（甕）	
（鉢）	
計	

名称（器種）	破片数
備前（壷）	3
（甕）	1
（鉢）	
（擂鉢）	1
（その他）	4
計	9
灰釉（皿）	
（鉢）	
（香炉）	
（銅緑釉）	
（その他）	
計	
鉄釉（碗）	
（壷）	
（皿）	
（その他）	
計	
唐津（碗）	
（皿）	3
（鉢）	2
（その他）	1
計	6

名称（器種）	破片数
伊万里（碗）	12
（皿）	7
（鉢）	
（その他）	6
計	25
その他の陶磁器（越前）	
（信楽）	
（織部）	
（志野）	
（その他）	38
計	38
土師質（皿）	33
（土釜）	
（その他）	2
計	35
その他（須恵器）	1
（土師器）	1
（黒曜石）	
（その他）	3
（不明）	7
計	12
総計	142

茶褐色土層
（3）

名称（器種）	破片数
青磁（碗）	1
（皿）	
（鉢）	
（盤）	
（香炉）	
（その他）	2
計	3
白磁（碗）	1
（皿）	9
（坏）	1
（その他）	
計	11
染付（碗）	3
（皿）	11
（鉢）	
（坏）	
（その他）	4
計	18
南蛮系（壷）	
（甕）	
（鉢）	
計	

名称（器種）	破片数
備前（壷）	
（甕）	1
（鉢）	
（擂鉢）	
（その他）	4
計	5
灰釉（皿）	4
（鉢）	1
（香炉）	
（銅緑釉）	
（その他）	1
計	6
鉄釉（碗）	
（壷）	
（皿）	
（その他）	
計	
唐津（碗）	1
（皿）	5
（鉢）	
（その他）	23
計	29

名称（器種）	破片数
伊万里（碗）	1
（皿）	1
（鉢）	
（その他）	4
計	6
その他の陶磁器（越前）	
（信楽）	
（織部）	
（志野）	
（その他）	73
計	73
土師質（皿）	64
（土釜）	2
（その他）	1
計	67
その他（須恵器）	6
（土師質）	2
（黒曜石）	
（その他）	
（不明）	
計	8
総計	226

白灰色土層
（5）
～
黒色土層
（10）

名称（器種）	破片数
青磁（碗）	
（皿）	
（鉢）	
（盤）	
（香炉）	
（その他）	
計	
白磁（碗）	
（皿）	3
（坏）	1
（その他）	
計	4
染付（碗）	
（皿）	4
（鉢）	
（坏）	
（その他）	1
計	5
南蛮系（壷）	
（甕）	
（鉢）	
計	

名称（器種）	破片数
備前（壷）	
（甕）	1
（鉢）	
（擂鉢）	1
（その他）	
計	2
灰釉（皿）	
（鉢）	
（香炉）	
（銅緑釉）	
（その他）	2
計	2
鉄釉（碗）	1
（壷）	
（皿）	
（その他）	
計	1
唐津（碗）	
（皿）	1
（鉢）	
（その他）	
計	1

名称（器種）	破片数
伊万里（碗）	1
（皿）	1
（鉢）	
（その他）	3
計	5
その他の陶磁器（越前）	
（信楽）	
（織部）	
（志野）	
（その他）	15
計	15
土師器（皿）	87
（土釜）	
（その他）	
計	87
その他（須恵器）	1
（土師器）	2
（黒曜石）	
（その他）	
不明	
計	3
総計	125

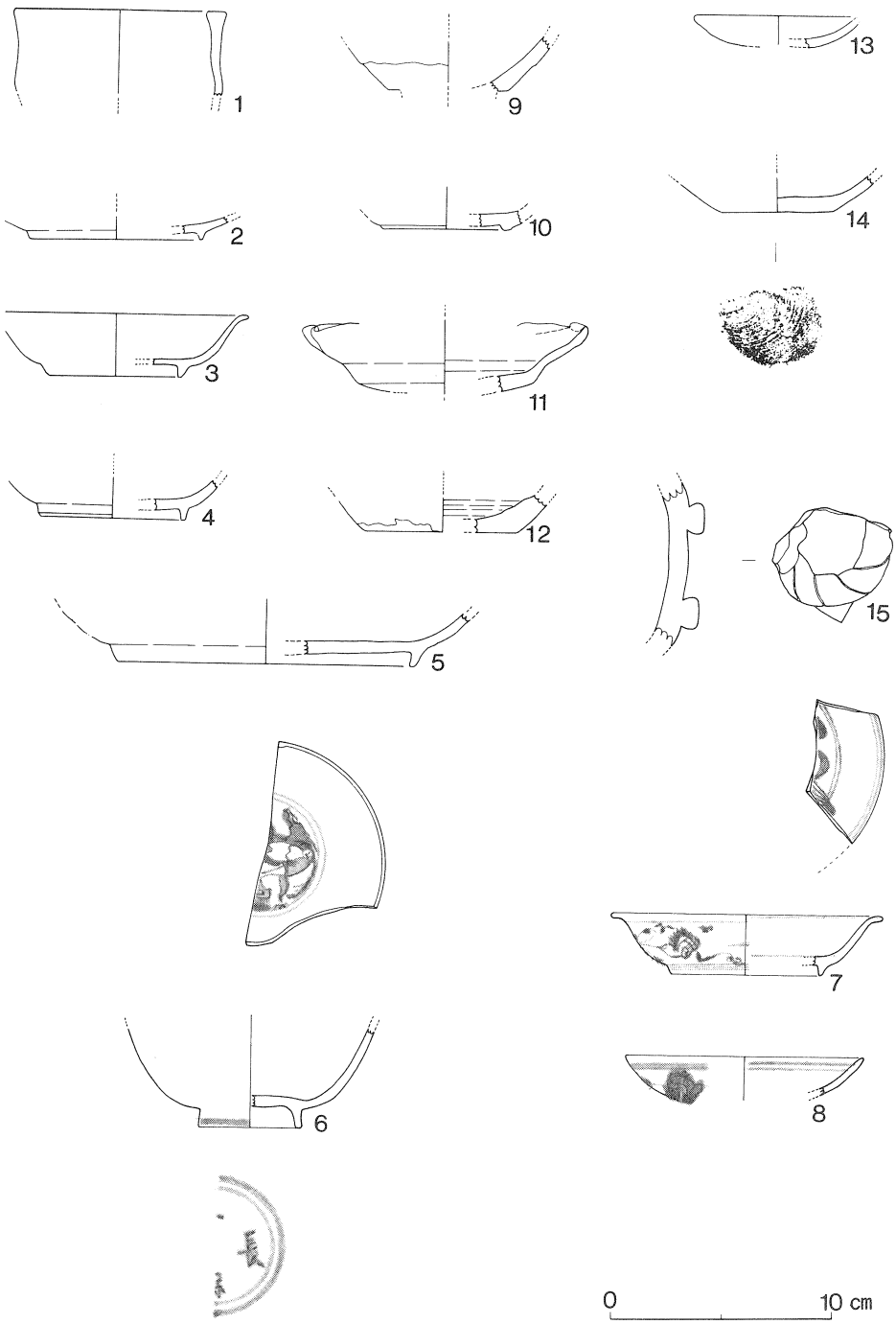


図９「ひふＧ」地区出土遺物実測図（1、2青磁、3～5白磁、6～8染付
9、10美濃焼、11唐津焼、13、14土師質土器、15備前焼）

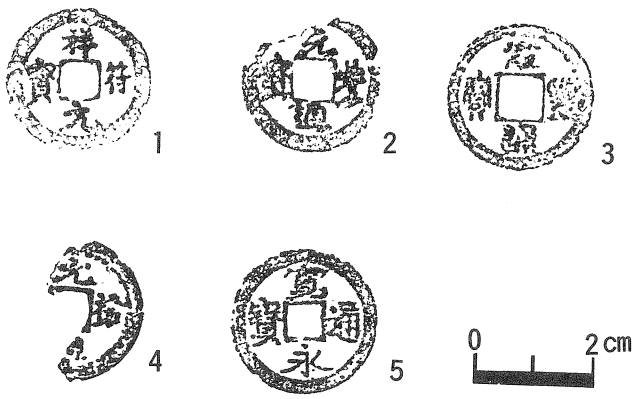


図10「ひふG」地区出土古銭拓本
（1祥符元宝、2・3元豊通宝、4元祐通宝、5寛永通宝）

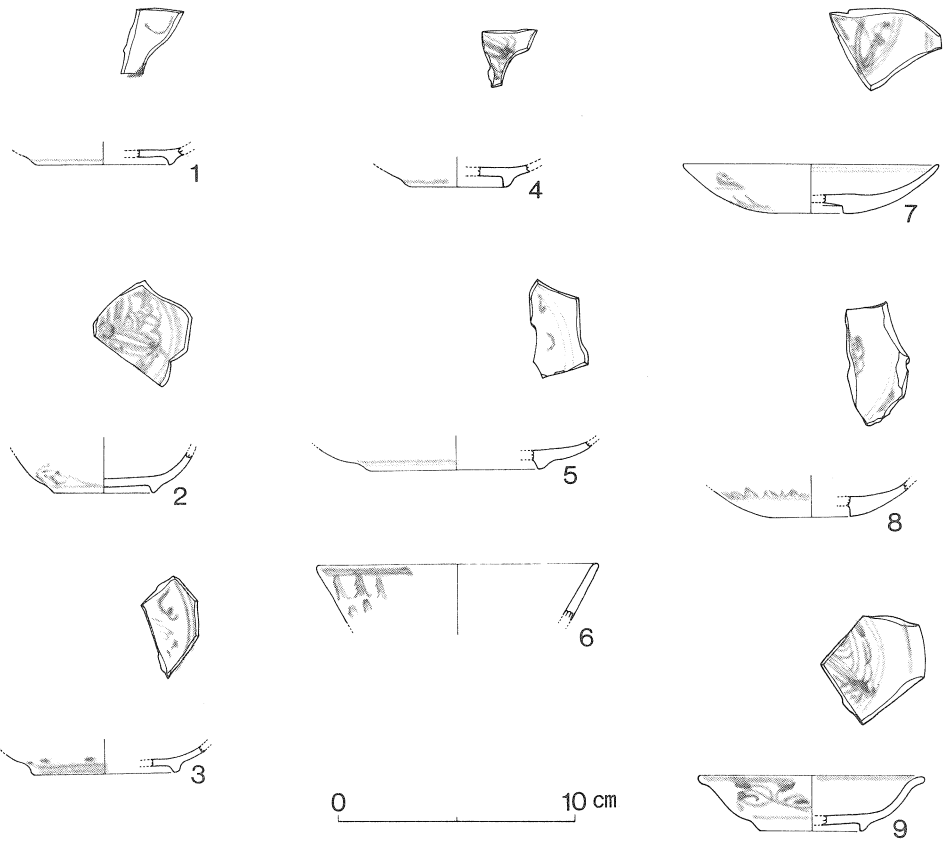


図11その他の地区出土遺物（染付）実測図　（1：ひ161－4、2：ま155－1、3：ひ161－4、4：ね170－2、5：ひ161－4、6：ひ154－2、7：へ160－2、8：ほ155－4、9：の172－3）

Ⅳ　結　　び

塩谷地区は以前から、月山城図に描かれた内容や周囲の地形等より、富田城の防御上重要な地であり、かなりの遺構が残存しているものと考えられていた。今回、当教育委員会が調査を行った範囲は、谷の中央部ともいうべき地点で、塩谷川沿いであったためか調査区を設定した大部分が川の氾濫原となり、遺構が検出できたのはわずか3カ所のみであった。出土した遺物は主として16世紀初～中葉のものであった。ほぼ時を同じくして、県教育委員会が発掘調査を行った史跡指定地内については、塩谷口付近で若干の杭列が、「ひふG」地区付近では石組状施設（図版10）・柱穴が検出され、土師質土器をはじめ多量の遺物も出土している。砂防河川のつけかえに伴う発掘調査では、掘立柱建物跡2、柵列3、土壙及び柱穴多数が検出され、多量の陶磁器片が出土している。一方、発掘調査は実施していないが、塩谷の丘陵裾部には、数多くの遺構が残されており、特に、明星寺跡は良好な遺構が残されていると推定される。塩谷地区から出土する陶磁器類をみると、16世紀初～中葉の物が主流で、富田城跡北側の新宮谷に存在する新宮党館跡とほぼ同時期にあたり、富田川河床遺跡で多量に出土している16世紀後半～17世紀の遺物が少ない点が特徴である。このことから、尼子氏の滅亡とともに、毛利氏による城下の再編成が行われたことが推測できる。こうして、谷全体を見わたしてみると、随所に遺構が存在していることがわかり、月山城図に描かれてる内容は、後世の作であるが故に信用できないとは、一概に決めつけられない。

県教育委員会では、現在、富田城関連遺跡群の現地調査や富田川河床遺跡の発掘調査を進めており、その中で新宮党館跡の発掘調査や富田城跡の分布調査を行っている。こうした一連の調査結果を総合した上で、塩谷遺跡のもつ性格を考えていくべきであろう。

参考文献

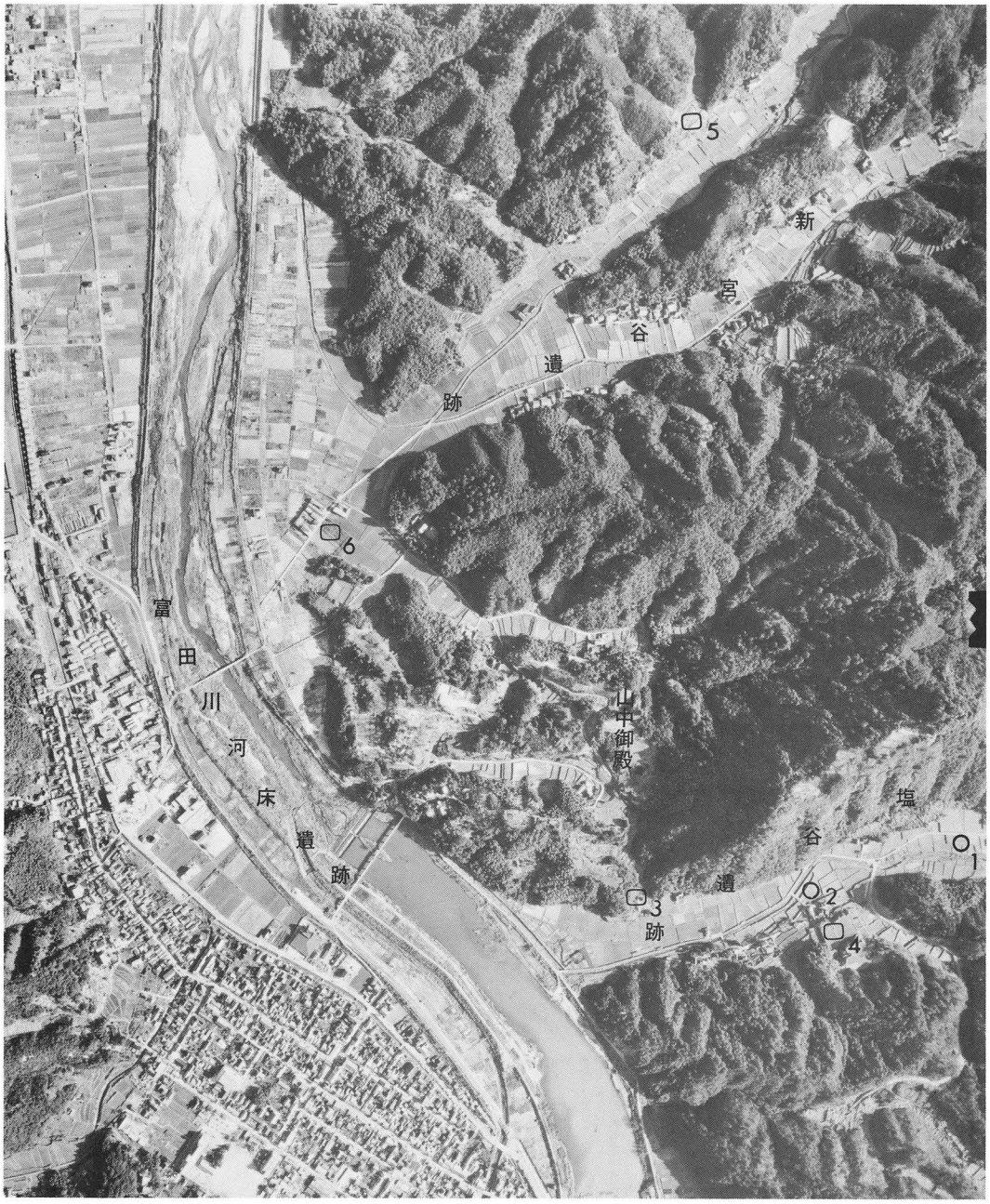
『富田川河床遺跡発掘調査報告』（広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団、昭和52年）

『史跡富田城跡』（広瀬町教育委員会、昭和55年）

前島己基「尼子氏・新宮党の居館」（『季刊文化財』第38号、昭和55年）

図　　版

図版1



史跡富田城跡周辺航空写真

（1．ひふG地区、2．となG地区、3．塩谷口、4．明星寺跡、5．新宮党館跡、6．里御殿跡）

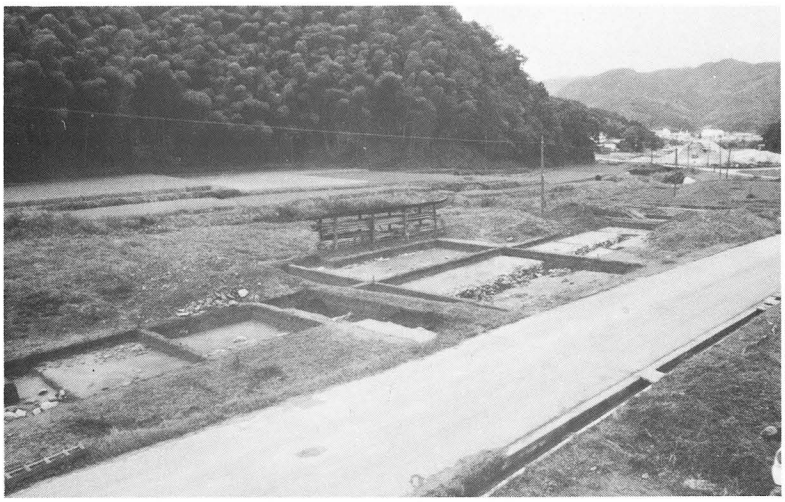
塩谷遺跡（塩谷川上流部周辺）遠景 ― 右の丘陵は月山城 ―

「はひG」地区　塩谷川氾濫による河原石（南から）

塩谷遺跡（塩谷川中流部周辺）遠景

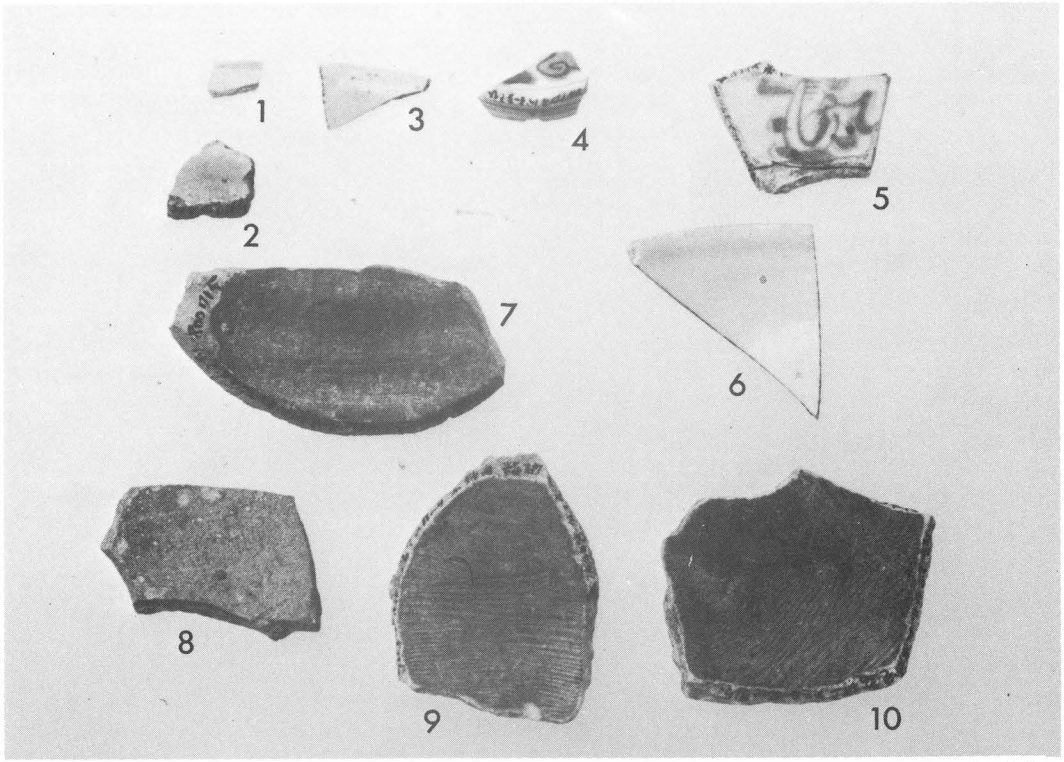
「ひふＧ」地区 遺構検出状況（西から）

「ひふG」地区
近景（東から）

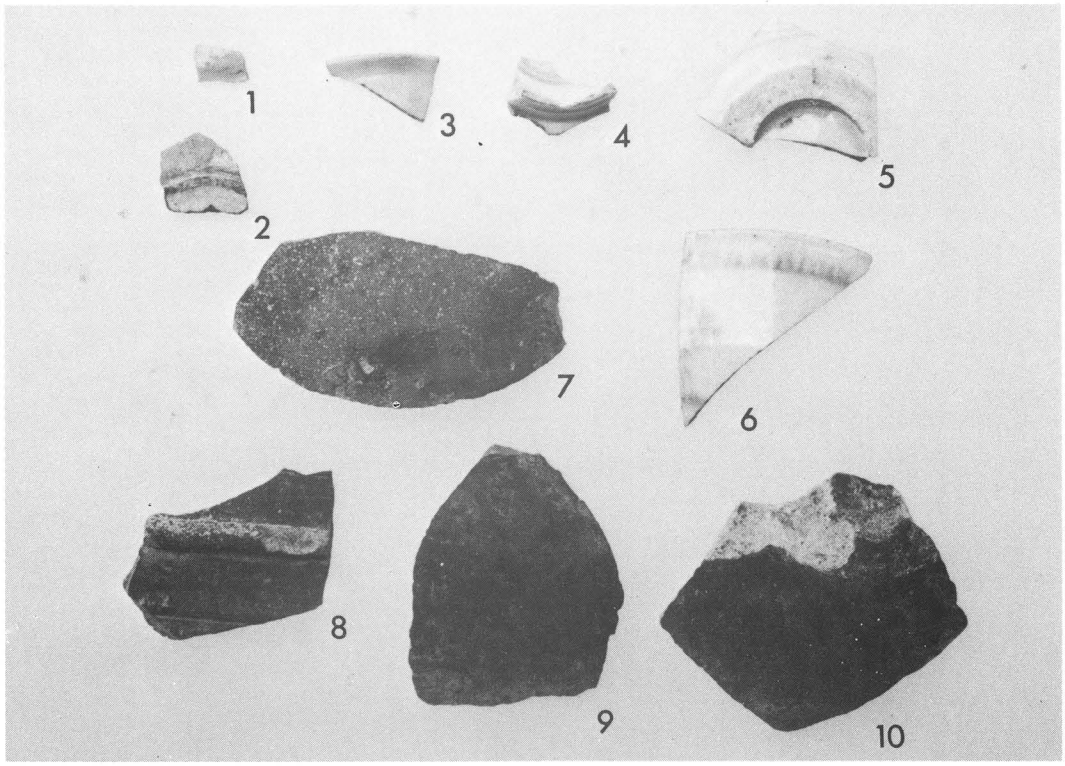


「ひふG」地区
の石垣（東から）

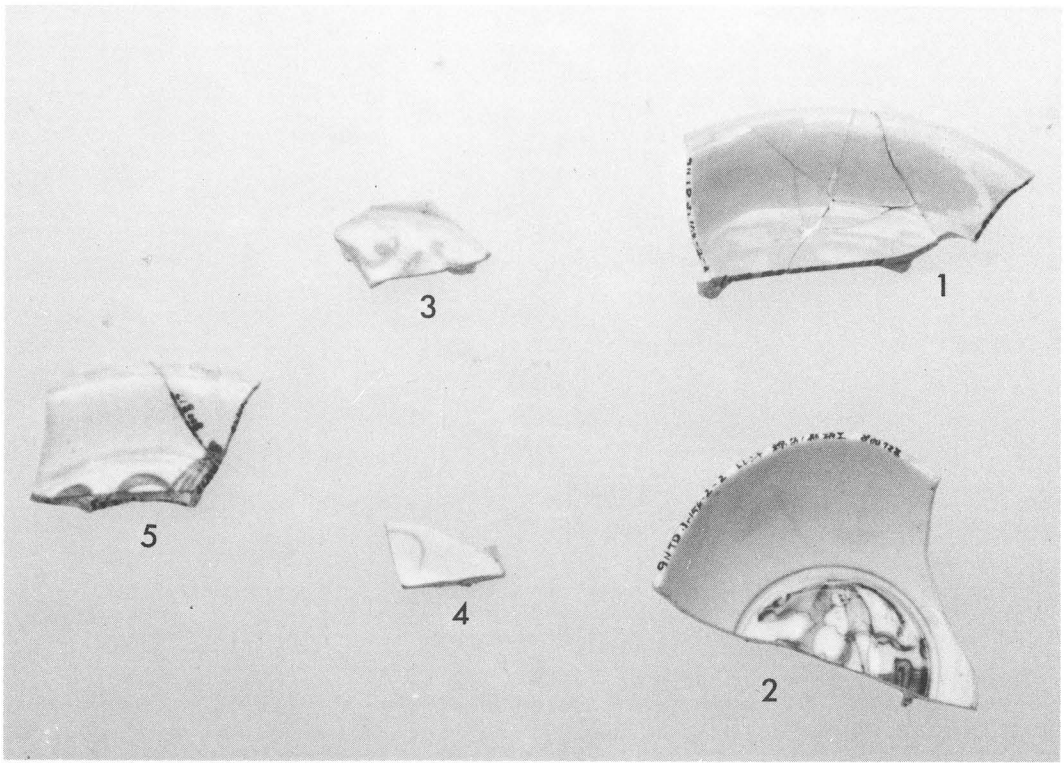
「ひふG」地区
の石垣（部分）



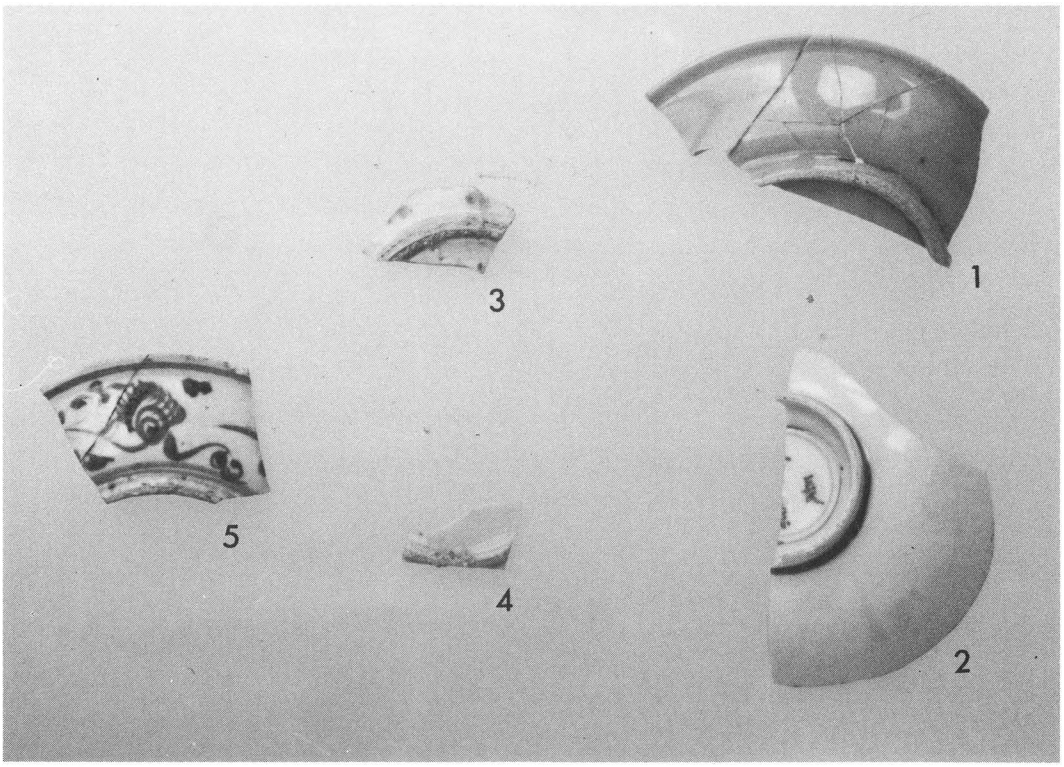
「ひふG」地区（第2層）出土遺物内面（1、2美濃焼、3白磁、4～6染付 7、8備前焼、9、10瓦質陶器）



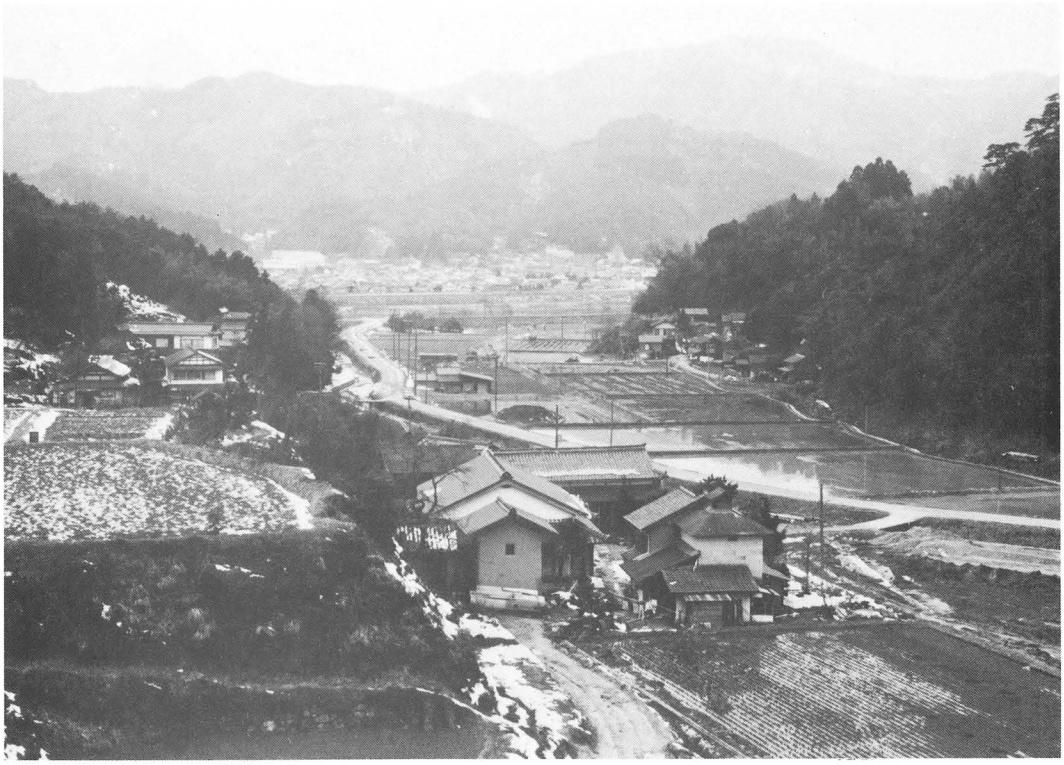
「ひふG」地区（第2層）出土遺物外面（1、2美濃焼、3白磁、4～6染付 7、8備前焼、9、10瓦質陶器）



「ひふＧ」地区（第２、３層）出土遺物内面（１、白磁、２～５染付）

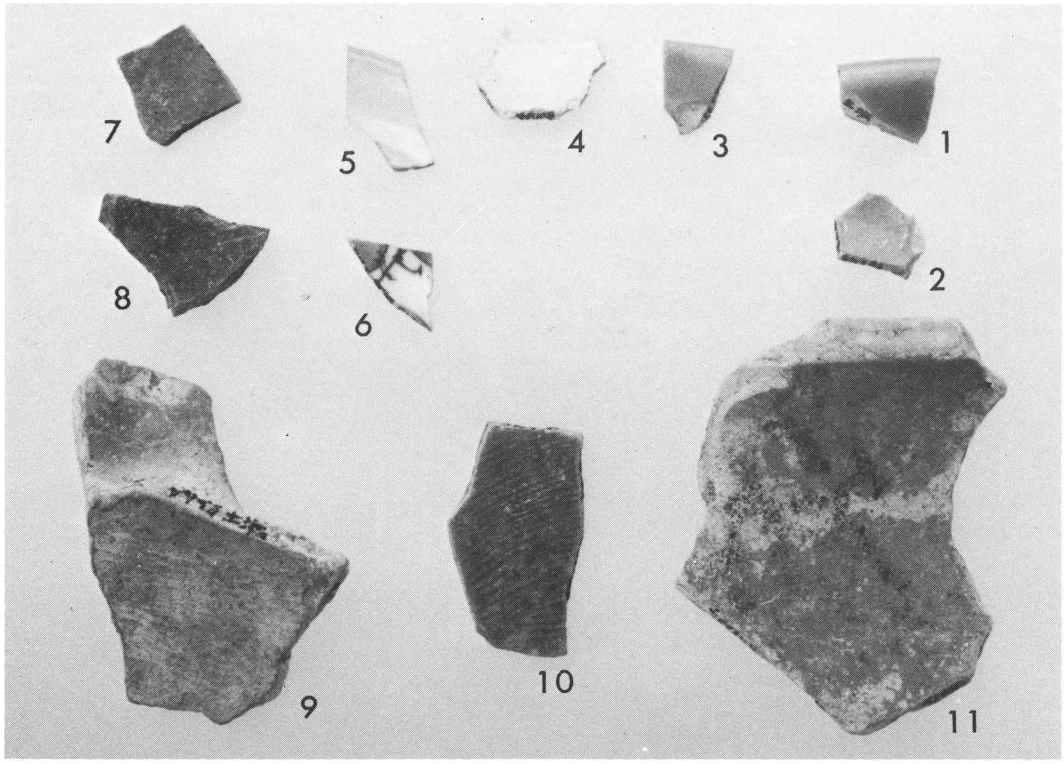


「ひふＧ」地区（第２、３層）出土遺物外面（１、白磁、２～５染付）

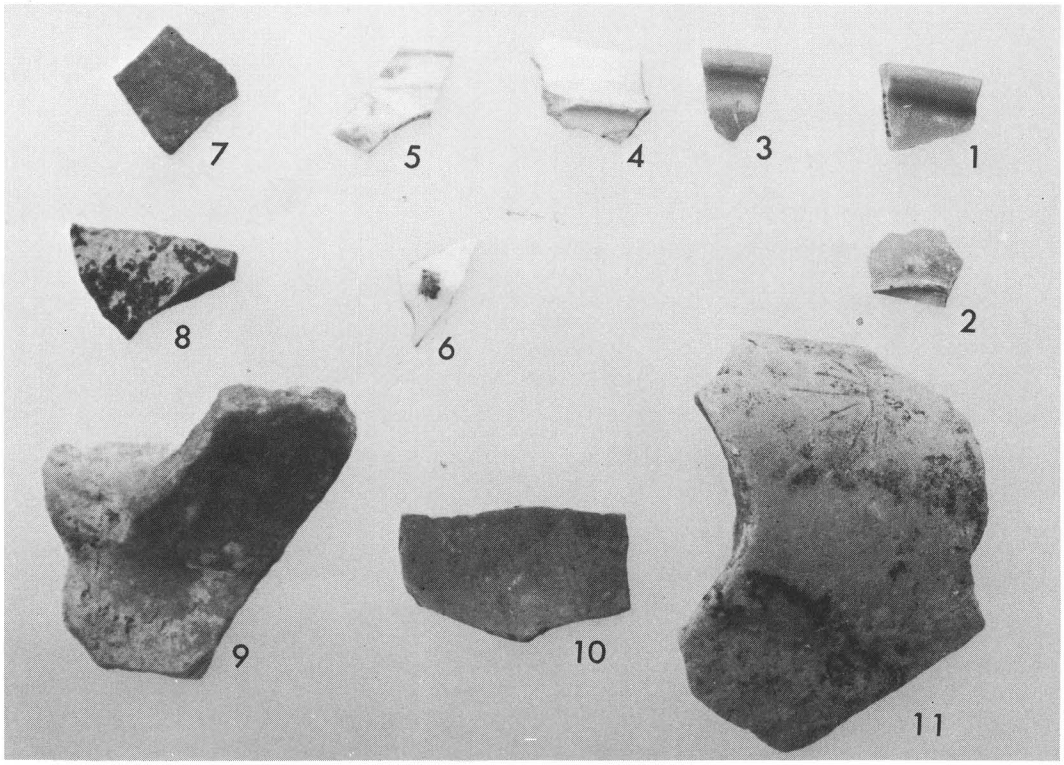


塩谷遺跡（塩谷川下流部周辺）遠景 ― 左の台地上は明星寺跡 ―

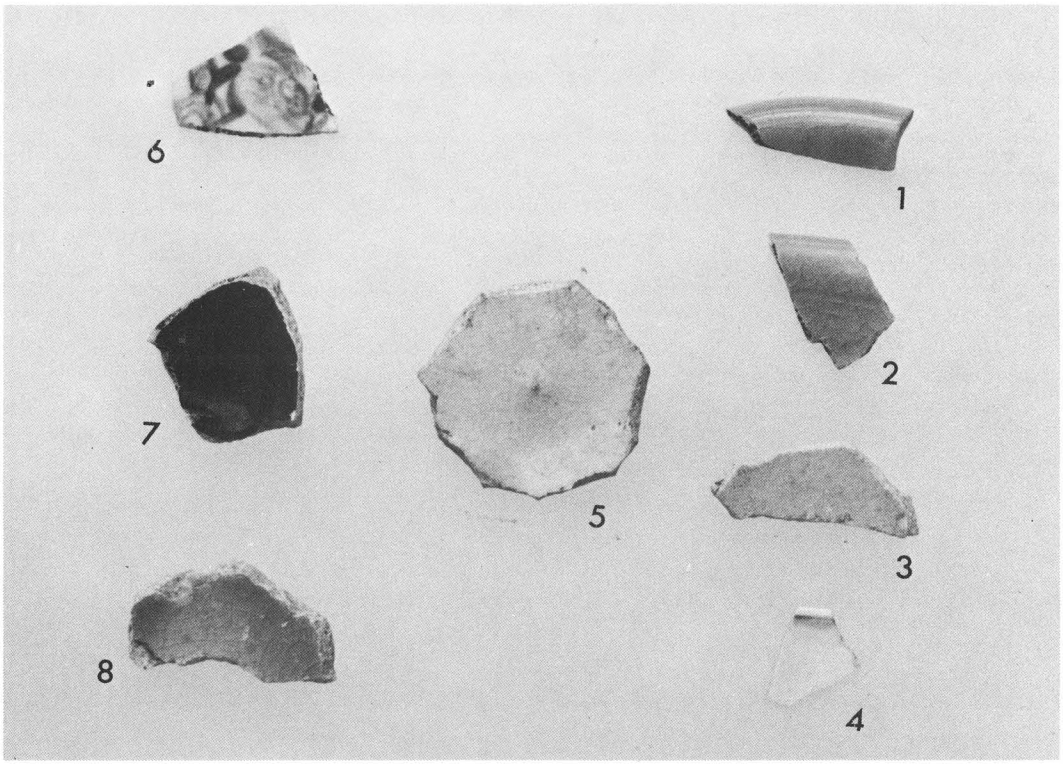
「となG」地区遺構検出状況（南から）



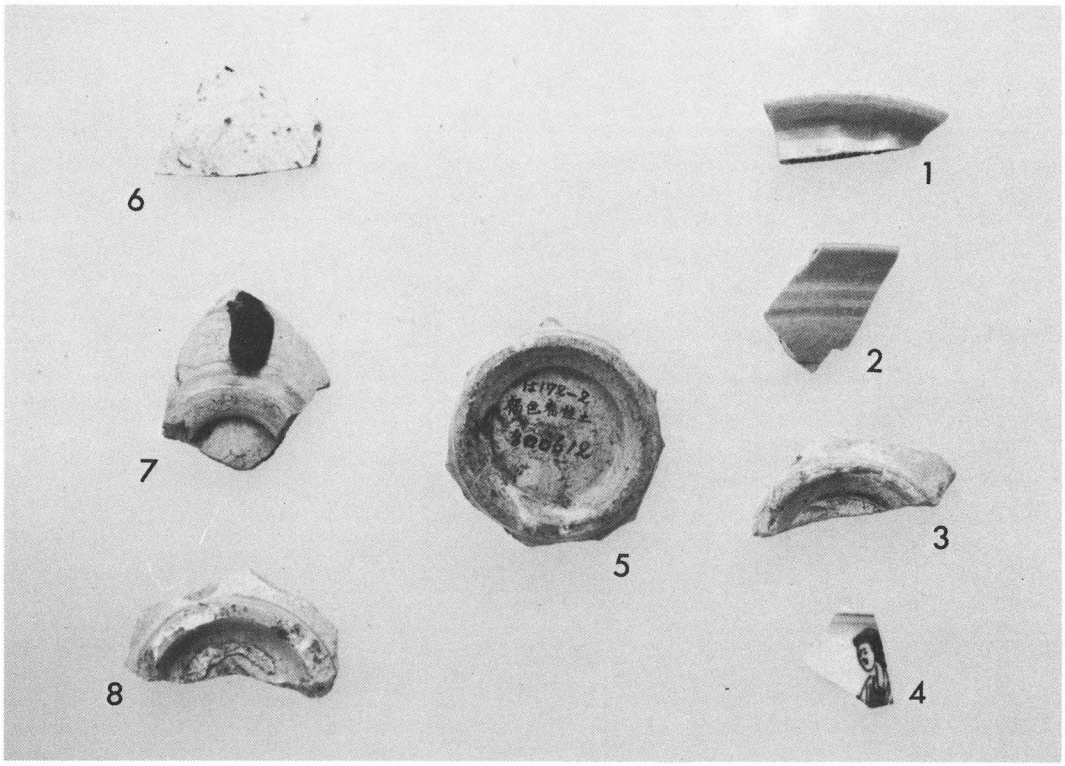
「となG」地区　土坑 2 出土遺物内面　（1～ 3 青磁、 4 白磁、 5 、 6 染付
7 、 8 備前焼、 9～11瓦質陶器）



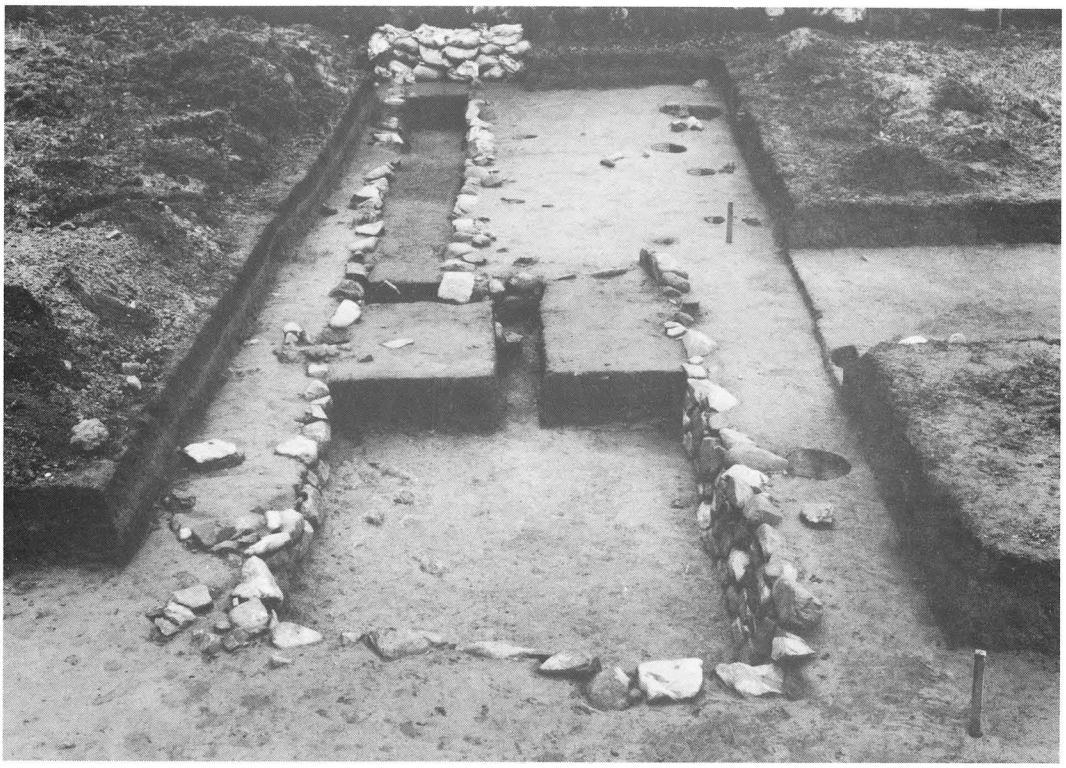
「となG」地区　土坑 2 出土遺物外面　（1～ 3 青磁、 4 白磁、 5 、 6 染付
7 、 8 備前焼、 9～11瓦質陶器）



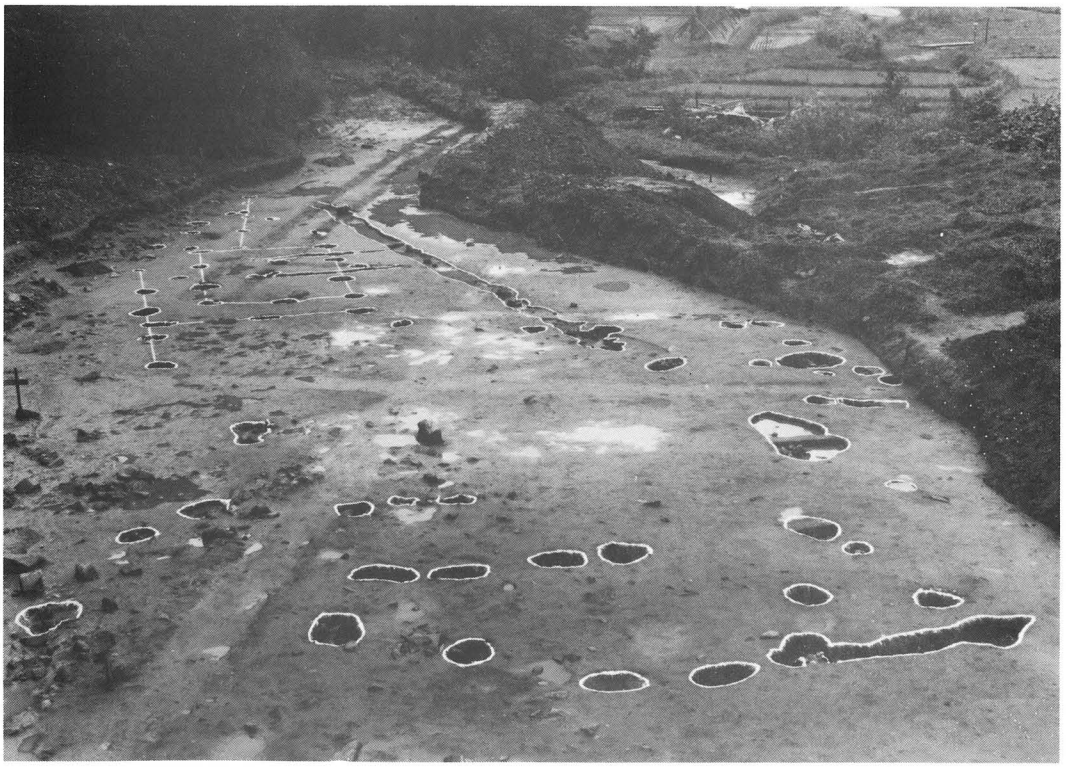
その他の地区出土遺物　内面（は162－1～3青磁、4染付
は172－5青磁、6染付、7、8美濃焼）



その他の地区出土遺物　外面（は162－1～3青磁、4染付
は172－5青磁、6染付
7、8美濃焼）



史跡指定地内の石積施設（西から）　—昭和55年調査—



砂防河川の予定地内の建物跡他（東から）　—昭和55年調査—

塩谷遺跡発掘調査報告書

1981年3月

発行　島根県能義郡広瀬町

広瀬町教育委員会

印刷　島根県能義郡広瀬町

岩　田　印　刷